

今、いちばん気になる統計は？

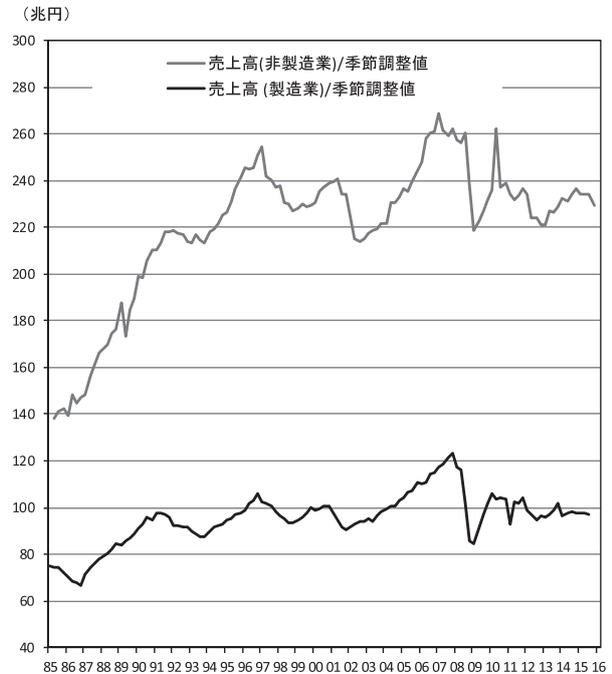
法人企業統計/売上高に注目

連日新聞報道等で伝えられる上場企業の決算は、足元では製造業セクターでやや減速感が強くなっているものの、年度を通じては増収増益で好調という企業も多い。一方広く日本企業全体の姿が見える法人企業統計(以下、法企)を覗くと上場企業とは少し違った姿が見える。上場企業は連結、法企は単体、国内企業のみという違いはあるが、法企の売上高を見ると製造業、非製造業とも90年代後半以降ほぼ横ばいと言ってもいい状況が続いている。

企業は利益を出さなければ生きてはいけない。利益の源泉は売上だ。売上が思うように伸びない中で利益を確保しようと思えば費用を削るしかないがそれは長続きしないだろう。原油価格下落のような交易条件の改善による増益も一時的だ。企業は売上を伸ばすために投資を行う。売上が伸びるからこそコストを負担できる。そのコストがまた他の企業の売上に繋がりという形で景気は良くなっていく。

(経済調査部 佐久間 啓)

資料 法人企業統計/売上高(四半期、季節調整値)



(出所)財務省

編集後記

年明けからの金融市場の混乱の影響は大きい。TOPIXは年明けから2月末までで▲16.1%の下落となった。1989年末の過去最高値からの下落相場でさえ3月末までで▲22.1%であったことを考えるとその衝撃の大きさがわかる。何時ものことだが急に世界経済に大きなダメージを与えるような問題が新たに発生したわけではない。

ウォール街に伝わる格言に「大相場は絶望と悲観の中で生まれ懐疑とともに成長し楽観の中で天井をつけ幸福感とともに消えていく」というのがある。急なセンチメントの変化も何時もの相場のパターンと言ってしまえばそれまでなのかもしれない。しばらくは楽観と悲観が交互に主役を務める場面が続くのだろう。雰囲気は流されず、冷静になりすぎず、木も見て森も見て考えていきたいものだ。

3月から4月にかけてはでは卒業、入学、入社、転勤と人が動く節目の季節。世界のトレンドからは外れているのかもしれないが年度替わりで気持ちも新たにスタートするとき。また3月、4月は月別の日本株の平均リターンが1位、2位の月でもある。(H.S)

○第一生命経済研レポートに関するご意見・ご要望は、keizai@dlri.dai-ichi-life.co.jpまでお寄せ下さい。

○本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。